

溢れでるカウパー汁が麻衣の指を濡らしてローションの役目を果たし、オナニーでは絶対に味わえないペニスがとろけるような快美感に射精欲が暴発する。

「あつ、出る、麻衣姉ちゃんっ、ああつ、うあああッ！」

憧れの姉の指で射精に導かれる最高の悦楽に、智洋は泣きながら腰を痙攣させた。

「ああつ、出てる、トモくんのいっぱい……あつ、あふつ、い、いいつ、ああんっ」

弟の勃起からビュクビュクツと発射された白濁液が、ほっそりとした指を汚している。弟の生温かいザーメンを肌で感じて、強烈なホルモン臭をたっぷり嗅ぎながら、麻衣も頂点に向かって一気に駆けあがっていく。

「くおっ、締まってきたぜ。イクのか？ おらおらっ、イクのかよっ！」

拓也もアナルの強烈な締めつけに、顔を真っ赤にして腰を打ちつけてくる。バイブも激しく動かされて、たまらずザーメンまみれの弟のペニスを強く握りしめた。

「うああつ、す、すごいっ、ダメ、もうダメ、ああつ、イキそう、イク、イクっ」

学園のマドンナが美貌をだらしなく歪めて、泣きながら卑猥に腰を振りたくる。姉弟そろって凌辱魔の餌食になり、二度と逃げだせない背徳の快樂地獄に引きずりこまれていく。

「イカせてやる。くうっ、ケツの穴でイカせてやるよっ！」

巨軀から繰りだされる激しい杭打ちを受けて、麻衣はついに全身の筋肉をピーンツと突っ張らせてガクガクと痙攣する。

「ひいつ、イク、イッちゃう、うあつ、いいつ、お、お尻が感じちゃううつ、麻衣、も、もうイキます、ああつ、イクつ、あつああああッ！」

強烈なオルガスムスに呑みこまれて、麻衣は性に狂った一匹の牝になる。涎れを垂れ流しながら、貪欲に腰を回転させて生徒の剛直を排泄器官で食いしめる。

「うおっ！ 出すぜっ！」

さすがの拓也も剛直をキュウキュウ締めつけられて白濁液を噴出した。射精は驚くほど長くつづいて、美麗な肉体を激しくのたうたせる。

「ひいいッ！ ま、また、すごつ、またイッちゃうつ、あひいいいいッ！」

凌辱者の熱いザーメンに直腸粘膜を焼かれて、麻衣は白目を剥いてさらなる高みへと昇りつめていくのだった。

智洋は射精後の虚脱感のなかで、姉の狂態をボーッと眺めていた。

憧れつづけた姉のアナルを目の前で犯されて、胸の内でさまざまな感情が複雑に入り乱れる。

姉の肉体を弄もてあそぶ拓也に対する怒りと、助けることのできない自分の腑ふ甲が斐いなさ。レ
イプされて喘ぐ姉を見たときのショックと裏切られたような思い。そして、美しすぎ
る姉に対してより深まっていく憧どうけい憬けいと羡慕。

「うあつ、ま、また出るよっ！」

麻衣がイクと同時に甘美なる手コキで二度目のザーメンを噴きあげながら、智洋の
なかで危険な妄想がふくらんでいく。

（麻衣姉ちゃん……）

最高の射精に腰を震わせながら、なんとかして姉を独り占めできないかと考えるの
だった。

